

## 傘鉾・風流傘の誕生 2

### —風流傘と鵲鉾—

段 上 達 雄

#### 【要 旨】

風流笠（傘）という言葉は『看聞御記』が初出で、傘鉾という言葉は京都祇園祭の鵲鉾に由来する。鉾という言葉が加わることにより、傘は依代としての性格が強まり、綾傘鉾や四条傘鉾を生みだす。そして、京都祇園祭は全国の都市祭礼に大きな影響を与えていく。

#### 【キーワード】

風流笠・看聞御記・鵲鉾・京都祇園祭・傘鉾

## IV. 風流傘の登場

### 看聞御記の風流笠

「ふりゅうがさ」という言葉の初出は『看聞御記』であろうと思われる。『看聞御記』は伏見宮貞成親王（後崇光院）が書いた応永23年（1416）から文安5年（1448）までの33年間の日記である。この日記の中に伏見御香宮神幸祭の記事が散見し、そこに風流笠という言葉が10件ほど出てくる。煩雑にならないように表「『看聞御記』に見る風流笠等」にまとめてみた。最初に出てくるのは応永23年（1416）9月9日の条の「風流笠拍物等参」である。風流笠と共に拍物（拍子物か？）という囃子を伴う芸能の一団が御所に来たというのである。ところが、「風流笠、門内に入らず、よって藪を切り開きこれを入れる」とある。それまでの4、5年は庭田という所で見物していたが、支障があるので御所で御覧になったという。この「風流笠」は被り笠などではなく、御所の門から入らないほど巨大な「風流傘」であった。翌年、御所の門が狭くて風流笠が入らないため、見物のための棧敷を用意させている。『看聞御記』の御香宮祭礼の風流笠の表記は数種類ある。風流笠の表記が最も多いが、応永27年9月9日の記事には「山笠」という言葉が登場する。これは風流傘ではなく、傘を立てた昇山の可能性がある。永享4年には「笠風流」という言葉が出てくるが、これは風流笠と風流踊の組合せを意味するのだろうか。応永26年には「笠一本、善啓が立願のためにこれを渡す」と風流笠を出した人物の名が記されるようになる。同様な記事は永享10年にも見られ、「成賢、立願による笠」と記されている。永享7年になると、「清賢笠」「浄喜笠」それに「地下笠」という笠が記されている。個人名の清賢や浄喜とは違って、地下とは平民あるいは庶民を意味し、庶民富裕層の出した風流笠が登場したものと考えられる。

表『看聞御記』に見る風流笠等

<p>応永23年 9月9日 (1416)</p>	<p>節供祝着如例。御香宮祭礼。風流笠拍物等参。於殿上被御覽。風流笠不入門内。仍藪ヲ切開被入之。此四五年於庭田有御見物。雖然当年計会故障申。仍於御所被御覽。則於殿上有一献。三位。重有朝臣。長資朝臣。行豊。寿蔵主。周郷等祇候。女中伺候。見物雜人群集。</p>
<p>応永24年 9月8日 (1417)</p>	<p>御香宮祭礼結構云々。御所門狭小。風流笠不入門内之間。田向宿所芝俊阿家。為神幸路之間。見物可行之由三位ニ令申。不可有子細。棧敷可用意云々。</p>
<p>応永24年 9月9日 (1417)</p>	<p>節供如例。三位以下。行豊等候。祝着了入棧敷。女中对御方。近衛。今参等相伴。惣得菴比丘尼達。此外男女濟々在棧敷。棧敷以矢槽構之。先有一献。祭漸渡。先風流笠拍物。次神輿。御子神主。各騎馬。次頭人新左衛門有善。薄色織狩衣。騎馬。僮僕練童四人。中間等如恒。次随兵数十人。着色々鎧。其美麗也。禪啓依宿願渡之云々。次又随兵数十人。着美麗鎧腹卷き。此中二小松内府重盛鎧一両有之。赤糸鎧金物銀。殊以美麗也。是宝泉立願渡之。次風流笠拍物等渡了。神幸無為珍重也。神主善理子息小冠。供奉。新補神主同供奉了。其後一献数巡有酒盛。三位。行豊等音曲施芸了。以外沈酔帰了。</p>
<p>応永26年 9月9日 (1419)</p>	<p>重陽佳節。幸甚々々。御節供如例。御香宮祭礼為見物田向二行如例年。姫宮。用健。東御方。廊御方。二條今参。小今参等相伴。男女共例人数候。祭頭人善国也。祭例式也。但笠一本善啓為立願渡之。見物了帰。</p>
<p>応永27年 9月9日 (1420)</p>	<p>重陽佳辰。幸甚々々。御節供祝着如例。椎野入来。正永参。祭礼為見物田向二行。若宮。姫宮。東御方。廊御方。二條殿。今参相伴。(略)祭漸渡。山笠。拍物等参。舟津拍参。三木拍。俄有触穢不参。頭人三木一義康。練童二人。萌木糸腹卷。雜色鹿毛狩衣。薄色。禰宜衣冠。神子等渡如例。風流笠等聊結構也。雜人群集。祭了一献。</p>
<p>応永28年 9月9日 (1421)</p>	<p>重陽佳節。幸甚々々。御節供祝着如例。祭礼為見物田向二行。若宮。姫宮三所。東御方。廊御方。上臈。今参等相伴。宝珠菴被来。用健老母。本所人数濟々候。椎野来臨。(略)人数例式也。次一献。申終祭渡。風流笠四五本聊結構。其外例式也。祭了供御膳。</p>
<p>応永30年 9月9日 (1423)</p>	<p>重陽佳節。珍重々々。御節供如例。抑祭礼前二於田向見物。然而依広時事。田向触穢之間。於御所令見物。風流笠等不入門内。拍以下参。雜人群集如例。</p>
<p>永享4年 9月9日 (1432)</p>	<p>雨降。重陽佳節。珍重々々。御節供祝着如例。其後庭田二行。御香宮祭礼為見物也。若宮。姫宮達。南御方東御方。春日。自余女中不参。近衛ハ違例。此間里居也。御乳人。今御乳人等。前宰相。隆富朝臣以下皆参祭依雨及晚。頭人義祐也。拍物秉燭以後渡。依雨笠風流一向令略。每事無美粧。</p>
<p>永享7年 9月9日 (1435)</p>	<p>朝晴。其後小雨下。晚祭之時分晴。朝御旅所参。岡殿方丈。御喝食。實載菴等入来。御宮筭給。永親。明盛定直等参。祭礼依雨遅々。及晚渡物等参。庭田へ不行。於御所見物。門出来之間笠等入。重賢。清賢笠一本。有風流。浄喜笠一本。風流渡之。地下笠数本。拍物等結構也。」</p>
<p>永享10年 9月8日 (1438)</p>	<p>御香宮参。晚帰参。明日祭礼。盛賢依立願笠一本風流。</p>

風流の花を上げた傘、それに趣向をこらした作り物を載せた傘は、すでに『年中行事絵巻』に見られ、飾り付けた傘は古くから存在したことは間違いない。しかし、現在、当たり前になっている「風流傘」という言葉は近世になって使用されるようになったようで、それまでは「風流笠」という表記で室町中期に出現するのである。

現在、伏見御香宮の神幸祭は伏見祭と呼ばれ、10月初旬に10日ほどかけて行われる。御香宮は伏見九郷の総鎮守社として現在も伏見全町の総氏神といわれ、昔は九郷それぞれから神輿が一基ずつ渡御し、御練物、武者行列、曳山巡行などが行われていたという。現在では風流花傘祭と呼ばれるように、花傘の行列が行われる。花傘は傘骨にそれぞれ造花をつけて飾り立て、傘下に御神燈の提灯を下げたものである。

## V. 京都祇園会と傘鉾

### 祇園祭の鉾と山

京都祇園祭は長期間行われるが、最も華やかな行事は山鉾巡行である。山鉾巡行では曳山の「鉾」と本来は昇山の「山」が登場する。現在の京都祇園祭では、長刀鉾、函谷鉾、菊水鉾、月鉾、鶏鉾、放下鉾、岩戸山、船鉾、それに北観音山、南観音山という「鉾」10、山伏山、孟宗山、太子山、郭巨山、保昌山、油天神山、螻蛄山、伯牙山、木賊山、霰天神山、白楽天山、芦刈山、占出山、橋弁慶山、役行者山、鯉山、八幡山、鈴鹿山、黒主山、浄妙山などの「山」20基、四条傘鉾、綾傘鉾という「傘鉾」2組が都大路を巡行する。祇園祭の「鉾」は曳山で、「山」は本来は昇山であった。船鉾以外の鉾、それに北観音山、南観音山は四輪の曳山である。祇園祭の鉾の本体である鉾胴は長さ約3.5mで幅約3.5m、その前後に鉾車4輪がつく。鉾胴の上部は囃子舞台となっており、稚児（人形の場合もある）や囃子方が搭乗する鉾胴の上には破風のついた切妻屋根があり、屋根の中央に真木を立てる。真木の最頂部には鉾頭がつき、その下に大幡、天王台、赤熊、榊、小幡がついており、真木の下部を覆うように網隠しの布が掛けられている。全高約25m、屋根までも約8mある。なお、長刀鉾の鉾頭は長刀で、北観音山と南観音山の真木は松の木で全高15mとなる。

それでは、長刀鉾などの曳山をなぜ「鉾」と呼ぶのだろうか。貞観11年（869）に疫病が大流行した。『祇園社本縁録』に「占部日良麻呂が勅を奉じ、六月七日に六十六本の矛を建て、その長さ二丈ばかり、十四日には洛中の男児及び郊外の百姓を率いて神輿を神泉苑に送って祭りを行った。これを祇園御霊会と号し、爾来毎歳六月七日、十四日を恒例となす」とある<sup>(20)</sup>。これが京都祇園祭の源流であるという。全国の国数に相応する66本の矛に依り憑かせた疫神を神輿に乗せて神泉苑に送って祭りをした。この矛が次第に発展して、今日の鉾になったというのである。実際に矛を立てている京都祇園祭の鉾はないが、垂直に立てる柱状の真木や長刀などに、その名残が見られる。

### 鉾とは何か

それでは、鉾（矛）とはどのような意味があったのだろうか。『日本書紀』の国生み神話の冒頭は次のように記されている。

「伊弉諾尊・伊弉冉尊、天浮橋の上に立たして（中略）廻ち天之瓊矛を以て、指し下して探る。是に滄溟を獲き。其の矛の鋒より滴瀝る潮、凝りて一つの嶋に成れり。名けて礮馭慮嶋と曰ふ。二の神、是に、彼の嶋に降り居して、因りて共為夫婦して、洲國を産生まむとす」

ここでは最初、天之瓊矛は海原を探り出す道具として使われ、次にその鋒から滴り落ちた潮水が固まっておのごろ島を形作ったというのである。この後、男女2神は交わることによって国々

を生み出そうとする。この話から連想されるのは、天之瓊矛が男性器の象徴であることであろう。このように考えると、縄文時代に作られていた石棒を想起させられる。これも男性器を象徴する器物であり、祭器と考えられている。

鉾は中国で発達し、日本に伝来した長柄武器である。鉾は矛とも書き、鉾身が柄と重なる部分が袋状（袋穂式）になっているのが形態の特徴である。その点、槍は槍身の元が細くなって柄の中に差し込む茎式なかごになっている。弥生時代の遺跡から出土する銅矛（銅鉾）は、当初こそ武器としての機能のある細形銅矛であったが、中細銅矛、中広銅矛、広形銅矛と次第に大型化し幅広の銅矛へと変化してゆく。考古学ではこれを武器から祭器への変化をとらえている。『魏志倭人伝』に「兵には矛盾木弓を用う」と記されているように、弥生時代には丸木弓とともに矛と盾が使用されていたことがわかる。右手で鉾を持ち、左手で楯を持つのが、当時の兵士たちの戦闘スタイルであった。鉾が武器として盛んに使用されたのは平安時代初期までで、南北朝期まで使われたが、次第に槍の普及によって戦場での役割を終えていった。

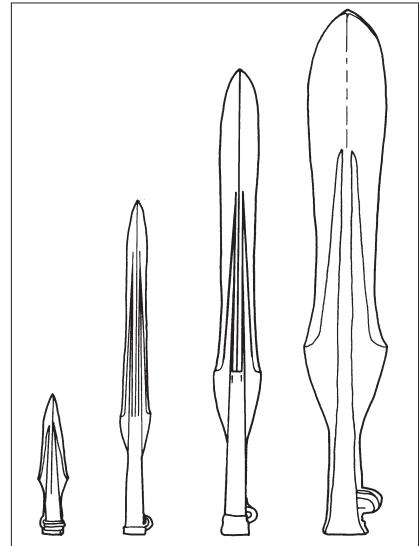


図12 銅鉾の形状変化

伊勢神宮では20年ごとの式年造替の時にさまざまな御神宝が新調されるが、その中に御鉾も含まれている。御鉾は式年遷宮の時の行列で捧持され、新しい神殿内に奉獻される。御鉾は全長306、3 cm、刃長30、3 cmと巨大である<sup>(22)</sup>。

天に向かって屹立する柱は、神が降りてくる依代として最もわかりやすい。天空高く垂直方向に伸びるもの、その中でも太くて大きなものに山がある。山そのものが神体山である三輪山は大神社の本社そのものである。大嘗祭の時に悠紀国と主基国の新穀を運ぶ行列に登場した標山しめのやまは作り物の山で、祇園御霊会の曳山の祖型であると考えられている。また、神の依代の中で細いものとして柱がある。諏訪大社の御柱や伊勢神宮の宮柱はその代表的な存在であるし、八幡神でも宇佐神宮の場合は、八世紀初頭に薦枕が作られるようになるまで、依代は宮柱であった。その流れの中で、祇園御霊会の66本の矛を見直してみれば、それが依代であることは明白となってくる。矛、あるいは鉾と呼ばれる武器形の祭器は垂直に立てることによって、神の依代としての機能を発揮できるのである。

#### 鵠鉾（笠鷲鉾）

傘鉾という名称を生み出す契機は、京都祇園会の鵠鉾ではないかと考えている。

中原師守の日記『師守記』の貞治4年（1365）6月14日の条に「今日祇園御霊会、例の如し。作山一両これ有り。笠鷲鉾これ無く。（中略）久世舞車これ無く、大名見物せず」と記されている。この日記によれば、笠鷲鉾は以前から出ているが、貞治4年の祇園御霊会には出なかったというのである。これによって14世紀中頃に笠鷲鉾が祇園会に登場していたことがわかる。どうも、これが史料における笠鷲鉾の初出のようである<sup>(23)</sup>。

『看聞御記』永享8年（1436）6月14日の条に「祇園会結構云々。公方御見物なし。早旦、北畠笠鷲ママ鉾（鉾か？）参る。屏（塀）中、門の内で舞しむる。練貫一太刀一を給う。往昔、菊弟（菊殿）において見物。再び会うに目に珍く眼を養う。その後大舎人ママ鉾（鉾か？）参る。練貫一太刀一を下される。見物衆、鼓操るなり」とある。同じく、永享9年（1437）6月14日の条に「祇園

会例のごとし。朝、大舎衛<sup>ママほこ</sup>杵。北畠笠鷺杵等参る」とあり、永享10年(1438)6月14日の条に「祇園会例のごとし。夕立降り雷鳴る。神幸に違乱か。岡殿方丈。御喝食来る。笠鷺杵雨中に参る。ぬれぬれ舞。その興あり。禄物は練貫一、太刀一を給う。その後大舎衛(大舎人杵か?)参る。禄は前と同じ。一献有り。内祭の儀例のごとし」と記されている。ここでは北畠家の笠鷺杵と大舎人の杵とは別であり、大舎人が出していた杵の具体的な説明はない。「北畠笠鷺杵」は北畠家が出していたものと思われるが、それでは同時に登場する「大舎衛杵(大舎人杵)」はどのような形状をしていたのだろうか。一条兼良(1402~81)が記した『尺素往来<sup>せきそおうらい</sup>』に「祇園御霊会今年殊ニ結構、山崎ノ定杵<sup>しずめほこ おおとねり</sup>、大舎人ノ鷺杵<sup>かたきさき</sup>、処々ノ跳杵<sup>おどり</sup>、家々ノ笠車、風流ノ造山、八ツ撥、曲舞、在所ノ所役、定テ深慮ニ叶フ歟、晩頃ニ白河杵入洛スベキノ由風聞候」とある。これが書かれた正確な時期は不明であるが、15世紀中期の祇園会での出し物がわかる。山崎は離宮八幡宮のことで、中世に油座の中心となった地であり、処々ノ跳杵はやすらい花のようなもので、家々ノ笠車とは公家や武家が奉納した傘を載せた車であると考えられている<sup>(24)</sup>。もし跳杵がやすらい花の真似であったとしたら、跳は羯鼓の童子と大鬼たちの踊りで、杵は傘のこととなるが、あまりにも関連する資料が少なすぎて、推測の域を出ないと思われる。なお、八ツ撥は羯鼓を用いた芸能で、曲舞(久世舞)は直垂や水干を着て舞う芸能で、南北朝以降に出現したものであるという。山崎や白河など、現在の山町や杵町の範囲から離れた地域からも祇園会に参加していたことがわかる。

大舎人とは平安期では織部司に属していた織り手たちが組織した大舎人座のことで、その後の西陣機業の祖となる織り手たちによって構成されていたと考えられる。

『諸国年中行事大成』<sup>(25)</sup>に収録された「祇園会古図」に描かれた鷺杵(笠鷺杵)の帽額(幕)をめぐらせた錦蓋の上には小さな太鼓橋が載せられ、その欄干に傘をくわえた白鷺の作り物が載っている。そして錦蓋の下には、太鼓や笛、鉦で囃し立てる男たちがいる。錦蓋の右手には鷺に扮した男二人が上体をやや右に傾けて右足を上げて舞う姿が描かれており、この舞手が被る鷺の頭部に小さな傘が取り付けられている。また、土佐光信(?~一五二五)が描いたという『月次祭礼図模本』にも笠鷺杵と鷺舞が登場する。第六幅には太鼓橋にとまった鷺を載せた笠鷺杵と諫鼓(鶏と太鼓)を載せた笠杵(綾傘杵)、船杵、杵などを描き、第五幅には鷺舞、笠杵型昇山などを描いている。

中原師守の日記から、鷺杵(笠鷺杵)が南北朝期の14世紀中頃には既に成立していたこと、そして、『看聞御記』や『尺素往来』によって、鷺杵が15世紀中頃まで祇園祭に出ていたことは間違いない。しかし、応仁の乱(1467~77)によって京都は灰燼と化し、祇園祭における鷺杵は歴史からその姿を消してしまう。京都自体で戦闘が長らく続いたことは、大舎人座の織り手たちにとって大変な痛手であったと思われる。

### 津和野の鷺舞と笠杵

京都祇園祭の鷺杵は鷺舞とともに消滅してしまっただが、鷺舞は鳥根県津和野町の弥栄神社に今も伝えられている。津和野の鷺舞は山口を経て京都祇園祭から伝わった芸能であるという。周防・長門・石見三カ国の太守だった大内教弘が、長禄3年(1459)に京都から山口に祇園社を勧



図13 『諸国年中行事大成』の「祇園会古図」

請した時、一緒に鷺舞も伝習させたという。そして、天文11年(1542)に津和野城主吉見大倉正頼が大内義興の息女を妻に迎えたことを契機に、山口祇園会の鷺舞が伝えられたと考えられている<sup>(26)</sup>。その後中断し、寛永20年(1643)または寛文8年(1668)に津和野藩主亀井家が京都で伝習させて復活させたというが、いずれの資料も江戸末期のもので、そのまま信用することはできない。これらの資料<sup>(27)</sup>によれば、京都祇園祭の鷺舞は一旦復活し、近世前期まで行われていたことになる。

津和野の鷺舞は毎年7月20日の弥栄神社御神幸と27日の御還幸とに演じられている。頭屋が鷺舞を統括して費用も負担することになっていたが、昭和37年(1962)に神社総代が頭屋を担当することとなり、儀式を行う頭屋敷も公民館(旧藩校跡。現在は町民センター)になった。鷺舞の一団は、頭屋2人、鷺舞を演じる舞方(雄鷺・雌鷺)2人、棒振り2人、羯鼓2人、笛・小鼓・太鼓・鐘各2人の囃方、歌方6人、警固8人などで構成される。そして、津和野の鷺舞では次のような唄が歌われる。

はしのうえにーおりたー とりはなんどーりーか かーわささぎーの  
 かーわささぎーの やーかーわささぎーの さーぎがはーしをわーたした  
 さーぎがはーしをわーたした しぐれのあめにー ぬれとーり とーり  
 やーかーわささぎーの さーぎがはーしをわーたした さーぎがはーしをわーたした  
 (橋の上に降りた、鳥は何鳥か、鶺鴒の、鶺鴒の、やー鶺鴒の 鷺が橋を渡した 鷺が橋を渡した、  
 時雨の雨に、濡れ鳥、鳥、やー鶺鴒の 鷺が橋を渡した 鷺が橋を渡した)

津和野の鷺舞では大笠鉦1基と小傘鉦10基の2種の笠鉦が用いられる。昭和5年(1930)の「由緒調」によれば、大笠鉦は「黒地錦の蓋の上に金製の鳳凰を挿す、柄の長さ七尺、人夫五人、此の大笠鉦万一重くて動かざりし時は災変あると云ひ伝へられたり」と記されている。現在の大笠鉦は、傘部の直径180cm、全高約360cm、傘骨は上段と下段の2段になっており、傘形が途中で屈曲している。黒い傘布と幕は一体になっており、幕部の四方に四菱紋を白く染め出している。傘頂上部には松の小枝と金銅製の鳥形(鳳凰とも鶺鴒ともいう)が載せられている。小傘鉦は、傘部の直径60cm、全高約360cm、濃灰紫色の傘布と幕は一体になっており、幕部の三方に四菱紋を白く染め出して蕨手紋を金色に染め抜いている。そして傘頂上部に彩色木製の小鷺と松の枝を立てる。かつては人夫5人で大笠鉦を捧持し、小笠鉦は1人ずつ持って鷺舞に随行していた。現在は町民センター前の水路に杭を打ち、そこに大笠鉦を中心に左右に小笠鉦5本ずつを縛りつけて立てている。

山口市の八坂神社の鷺舞は江戸中期に中断し、津和野の鷺舞を伝習して昭和31年(1956)に復活している。

### 鶺鴒と鷺

笠鉦に伴う芸能が鷺舞であるにも係わらず、鶺鴒鉦とか笠鉦と表記される理由は、『祇園会古図』に描かれた傘上の小さな太鼓橋にヒントがある。カササギと橋という組合せは、七夕の織女星と牽牛星の説話を連想させることが目的であった。宋代の『歳時広記<sup>(28)</sup>』に引用された『淮南子』の佚文<sup>(29)</sup>に「鳥鶺鴒、河を填めて橋を成し、織女を渡らしむ」という一文がある。鳥鶺鴒とはカササギのことで、織女が鶺鴒の橋を渡って牽牛のもとに行くというのである。また、日本に目を向けると、大伴家持(718頃～



図14 津和野の鷺舞での大笠鉦と小笠鉦

785)の「鵲の 渡せる橋に おく霜の 白きをみれば 夜ぞふけにける」という和歌は『小倉百人一首』や『新古今和歌集』で人々に親しまれている。これは冬の歌であるが、七夕の鵲橋を意識していたことは間違いない。また、天平勝宝3年(751)の序文をもつ『懐風藻』の出雲介吉智直の七夕の漢詩の中に「仙車鵲の橋を渡り、神駕清き流れを越ゆ」という一文がある。日本においても、七夕の鵲橋伝説は古代から良く知られていたのである。

日本ではコサギ、チュウサギ、ダイサギ、ゴイサギ、アマサギ、アオサギなどの鷺の仲間が住んでいる。その中で白鷺と呼ばれるのは、コサギ、チュウサギ、ダイサギであるが、いずれもサギ科コサギ属である。それに対して、カササギ(鵲)はスズメ目カラス科の鳥で、カチガラスなどと呼ばれ、福岡県や佐賀県の有明海沿岸の平野部などに棲息している。カササギは頭から胸と背は藍色か黒色で、腹は白く、肩に白紋がある。カササギはサギとはまったく別種の鳥である。カササギは韓国の国鳥でもあり、東アジア北部では吉兆の鳥と考えられていたらしく、鵲橋とは男女の良縁を意味するという。

日本ではカササギは九州の一部にしか棲息しておらず、京の人々がカササギを見たことがなかった可能性は高い。文字でしか知られていない鳥で、カササギという鷺に似た呼称から、白鷺と重ね合わせてイメージしたと考えることもできる。また、鷺は水田に多く飛来することから、田の神の使いと考えられたのではないだろうか。日本武尊の靈魂が白鳥になって故郷に飛んでいったという記紀の説話や、『豊後国風土記』的にして射た餅が白い鳥となって飛び立ったという伝説から、白鳥は靈魂、あるいは神靈の姿を表す鳥であったと考えて良いだろう。古代説話に登場する白鳥は、東北地方に飛来するスワンではなく、西日本にあまねく棲息する鷺であったと思われる。

「鵲銚(笠鷺銚)」を分解して次のような式にしてみた。

笠鷺銚 = カサ(笠・傘) + サギ(鷺) + ホコ(銚) = カササギ(鵲) + 銚 = 鵲銚

笠鷺銚(鵲銚)は京都の祇園会の中で誕生した、いわゆる「風流傘」系統の傘の出し物であった。祇園会では垂直方向に伸びる柱(真木)を神靈の依り憑く「銚」に見立てていた。そこで、笠鷺銚では、傘の柄を銚と見立てて傘銚としたが、それに趣向として鵲のイメージを重ね合わせ、笠鷺銚としたのであろう。丸い傘の形は魂のタマにも通じるのではないのか。そして芸能に伴う傘の伝統のもとに鷺舞を加えたのである。当時の京の人々は、その優れた洒落気に喝采したことだろう。笠鷺銚はその後の「傘銚」という名称を生み出したと考えられる。いわゆる「風流傘」に「銚」のイメージが加わることによって成立した「傘銚」は依代的性格が強まった。そして、それが近世に各地の都市祭礼の中に傘銚が取り込まれていく原因の一つになったと考えられるのである。

駄洒落のようだからといって馬鹿にはできない。近代以前、日本では和歌の本歌取りのように、良く知られた歌の言葉を用いて新しい歌を作り、言外の意味を付け加えたりするようなことが重んじられていた。和歌の知識がなければ、本歌取りの歌を作り出すことは不可能であった。文字遊び的なイメージの重複を楽しみ、そしてそれを良しとする文化があったのである。

## VI. 傘と笠

笠銚という表記であっても、被り笠ではなく傘銚であることは間違いないが、なぜ、笠銚という表記がされたのかについて考えてみたい。

### 蓑笠は来訪神の姿

『日本書紀』巻第一「神代上」の一書に、高天原を追放された素盞鳴尊について次のように記されている。「時に、霖ふる。素盞鳴尊、青草を結束ひて、笠蓑として、宿を衆神に乞ふ。衆神の曰く、汝は是躬の行濁 悪しくして、遂ひ謫めらるる者なり。如何ぞ宿を我に乞ふ。といひて、遂に同に距く。是を以て、風雨甚だふきふると雖も、留り休むこと得ずして、辛苦みつつ降りき。爾より以来、世、笠蓑を着て、他人の屋の内に入ることを諱む。又束草を負ひて、他人の家の内に入ることを諱む。此を犯すこと有る者をば、必ず解除を償す。此、太古の遺法なり。」この『日本書紀』の記載は、素盞鳴尊が高天原を追放されて長雨に遭った時、青草を束ねて笠蓑として神々に宿を借りようとしたが、高天原での乱暴狼藉を理由に断られたという話である。

素盞鳴尊が身につけた素朴な笠と蓑を連想させるものが伝えられている。伊勢神宮の御笠と御蓑である。伊勢神宮では毎年5月14日に行われる風日祈祭において、この御笠と御蓑をお供えする。矢野憲一氏によれば、「神宮の菅笠は埴輪の人物が被る笠に似ている。高さ26cm、直径31cm、縁に細い芯を入れ、菅でからげて上部を束ね、木綿糸で結ばれている」という。また、「神宮の(御蓑)は実用品でないから簡略されて、頸につけるところが輪状になっていて長さ60センチほどのものである」と述べている<sup>(29)</sup>。

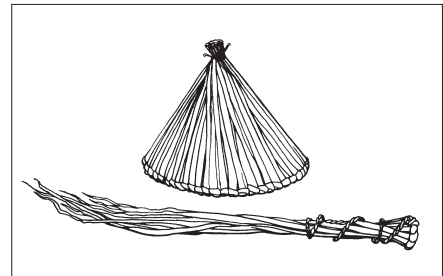


図15 伊勢神宮の御笠と御蓑

『日本書紀』が編纂された奈良時代には、蓑笠姿で他家に入ること、あるいは束ねた草を担いで他家に入るとは、古くからの禁忌とされていたようである。それは古代において蓑笠姿の来訪者は神であることを意味していたからではないのか。例えば、秋田の男鹿半島には今なお多数のナマハゲ行事が伝えられているが、ナマハゲは仮面を被り、蓑状のケゲを着用して各家を訪問する。また、山形県遊佐町のアマハゲも同様で、ケンダシを着て家々を訪れる。また、全国各地に散在するカセドリは来訪神行事と考えられていが、蓑笠を着用することが多く、誰であるかわからないようにしている。福岡県を中心に大分県などに分布する「楽打ち」という太鼓踊りでは、大分県国東市の吉弘楽のように、腰蓑を着用して踊るものが多いが、これも神霊が着た蓑笠の名残と考えられる。また、沖縄県石垣島のマユンガナシも蓑笠を着て家々を訪問するが、これも来訪神である。

宮本常一先生が『絵巻物に見る日本庶民生活誌』の中で「『信貴山縁起絵巻』尼公巻に見える尼公もまた私人として労苦の多い旅をしている。自分は馬に乗っているが、従者は荷を背負いで、その上に蓑をかけ、綾藺笠のような笠を被り、杖をついている<sup>(30)</sup>」と紹介しているように、古代中世において蓑笠は旅姿でもあった。雨の降る時には雨具となり、寒い時には防寒具、暑い時には日除けとなり、野宿する時には布団代わりとなったであろう。素盞鳴尊の旅姿が蓑笠であったのは当然のことであった。

仮面を被ることは神などに変身するための重要な手段であるが、笠で顔を隠すのも同様の意味があるのではないだろうか。このように考えると、例えば関東地方に多く分布するささら獅子舞に登場する稚児が幕を垂らした笠で顔を隠すのは、神の「よりまし」であったためだと思われる。このような、幕のついた笠を稚児に被らせる民俗芸能は各地に分布する。それは帽額を巡らせた傘からの影響と考えることもできる。そして、盆踊りにおいて編み笠で顔を隠すのは踊りに加わる祖霊を意味したのではないのか。



昔話に登場する蓑笠の中には、天狗の隠れ蓑や隠れ笠のように、着用すれば姿が見えなくなるという摩訶不思議な力を持った宝物があった。本来、この隠れ蓑や隠れ笠は神の能力の一部が付与されていたものと思われる。

以上のことから、蓑笠は来訪神の象徴であったと考えられる。柄のついた傘は、カサという表音から笠につながり、笠には来訪神が着用する道具という意味が付随していたため、傘も神に関わる道具としてイメージが付与されたのであろう。

### 傘と笠

現代の意識では、笠は頭に被る「被り笠」であり、傘は柄のついた「差し傘」で雨傘や日傘を意味する。音読みでは、傘は「サン」で笠「リュウ」となり、中国ではそれぞれまったく違う器物として考えられていたことがわかる。ところが、日本では傘と笠の訓読みは同じ「かさ」となる。これは時代的に先行する被り笠から、傘もカサと呼ばれるようになったためと考えられる。先史時代から使われてきた笠に対して、最初に日本に導入された柄のついた傘型の器物が蓋であったことも原因である。例えば、伊勢神宮の式年遷宮の度に新たに作られる神宝の中に「赤紫綾御蓋」と「菅御笠」がある。双方とも、神霊が遷座される時の行列に付き従う傘状の威儀具で、蓋と笠が同時に用いられている。「赤紫綾御蓋」は傘部の平面形は正方形をしており、「菅御笠」は被り笠の菅笠に柄をつけたような形で、平面形は丸い。蓋は宗教的権威や政治的権力を表す器物として導入されたため、生活とは直接関わらなかった。そして笠よりも新しく使われ始めた。そのため、被り笠のイメージが強すぎて、柄付きの傘にも「かさ」という呼び名が引き継がれたのである。

笠が傘を表す事例は多いが、傘が被り笠を意味する例を見つけることはできなかった。このようなことから、「笠は傘でもあり、傘は笠ではない」という定義が成立する。なにやら禅問答のようになったが、日本では笠と書いても傘の場合があり、傘と書いたら笠ではなかった。傘と笠の表記にぶれが生じていたのである。

## Ⅶ. 祇園祭と傘鉾

応仁の乱前後の京都祇園会の様子を窺える史料がある。『祇園山鉾事 応仁一覽(乱) 之後再興』であるが、残念ながら書かれた正確な時期はわからない。この史料には乱後の復興した山鉾などが列挙され、その中に「一、綾小路室町之間 はやし物」との記載がある。これは綾傘鉾のことである。この史料の後半部分には応仁の乱以前の祇園会での山鉾の巡行状況が書き記されている。6月7日に行われた前祭分の計31基の山鉾などが掲載されているが、その中に「こきやこはやし物 四条油小路と西洞院間」と記されている出し物は、現在の四条傘鉾を指している。また、6月14日に催されていた後祭分27基の中に「かさほく 大との坊」があるが、これは大舎人のことではないかと推測される。なぜなら、他の山や鉾などが町名などで山町や鉾町を表わしているのに、これだけは違って、「大との坊」という表記で、地区ではなく、何らかの集団による出し物と考えられるからである。「大舎人」と「大との坊」との言葉の類似性だけで判断するのは難しいが、大舎人の鶴鉾から「かさほく」、すなわち傘鉾という言葉が導き出されても不思議ではない。

応仁の乱の後、明応9年(1500)に京都祇園会の山鉾巡行が復活する。同年6月6日の『祇園会山鉾次第以闡定之間』に記された「十三番 かさはやし 四条油小路ト西洞院町ノ間也」は四条傘鉾、「廿一番 こきやこはやし あやのこうちと室町間」は綾傘鉾のことである。

「かさほく 大との坊」はさておいても、応仁の乱以前に見られた大舎人の鶴鉾は、乱後には

姿を消している。それに対して、乱前には四条傘鉾である「こきやこはやし物」が記され、乱の後も四条傘鉾の「こきやこはやし物」や綾傘鉾の「こきやこはやし物」「はやし物」が登場する。四条傘鉾も綾傘鉾も「こきやこはやし物」と呼ばれていることから、同様な出し物であったことがわかる。傘鉾の存在こそ確認できないが、何らかの囃子物（音楽を伴う所作もの）であったことは間違いない。

綾傘鉾も四条傘鉾も現在は台車の上に傘鉾を立てた曳山となっているが、本来は手で持つ棒持型の傘鉾であった。宝暦7年(1757)に京都で刊行された『祇園御霊会細記』に綾傘鉾と四条傘鉾の図が掲載されている。綾傘鉾は傘頂上部に鶏と御幣2本が立てられ、雲立涌文の入った傘垂がり(幕)を巡らせている。2人の持ち手が傘鉾を捧持し、その周りに面をつけて赤熊を被った棒振り踊りの男が3人、それに鉦や笛の囃子手が3人いる。囃子手も赤熊を被っている。列の先頭には長い棒を持った警固役3名、そして傘の手前には御幣を手に持った稚児3名が描かれ、それぞれ差し掛け傘を持つ少年と団扇と床几を持つお付きの少年が付き添っている。四条傘鉾は傘頂上部に松の木と御幣3本を立てた花瓶が立てられ、花瓶には3本の捻り棒のような物がつけられている。傘を覆う傘布と傘垂がりは同一の布で作られ、花と唐草文が入っている。持ち手は一人で、周辺には赤熊を被り素面の棒振りの踊り手が1人、鉦、太鼓、笛などの囃子手は袴姿である。先頭には3人の警固役が棒を持って歩いており、二人の稚児は大人の片肩に乗せられ、指し傘を持った少年と団扇と床几を持つ少年がそれぞれ1人ずつ付き添っている。また、広げた扇子を持った袴姿の男が2人いるが、これは鉦町の世話役であろうか。

#### 綾傘鉾

現在、京都祇園祭の山鉾巡行には綾傘鉾と四条傘鉾が参加している。

綾傘鉾は京都市下京区綾小路通室町西入ル善長寺が鉾町である。現在、綾傘鉾には2基の傘鉾が巡行する。傘部はそれぞれ直径2.6mの緋綾の蓋(きぬがさ)である。1基目の傘頂上部には木彫り彩色の鶏を載せ、綴れ織りの「飛天図」の傘垂がりを巡らせ、傘縁部からは4本の総角(飾り紐)を垂らす。平成5年(1993)に傘垂がりの「飛天図」の寄贈を受け、台車の欄縁や金具、懸装品などは平成6年(1994)に新調されたものである。それ以前の傘垂がりは会所のある大原神社で会所飾りとして披露されている。2基目の傘鉾の頂上部には松の木と白い御幣3本を立て、傘垂りとして人間国宝の染織家森口華弘氏による友禅染「四季の花」を巡らせる。この懸装品は昭和48年(1973)に製作されたものである。山鉾巡行時、6人の稚児には傘が差し掛けられ、棒振り囃子の一行が随伴する。棒振り囃子の構成員は、鬼形2人、太鼓2人、囃子方5、6人で笛と鉦を担当する。最初、太鼓2人が金銀の小太鼓を掛け合いで打ちながら廻り歩き、途中から鬼形が登場し、軽く跳ねるように棒を振り回しながら踊り廻る。綾傘鉾



図16 『祇園御霊会細記』の綾傘鉾



図17 『祇園御霊会細記』の四条傘鉾

は、棒振り囃子という芸能に伴う傘鉦である。この棒振り囃子は壬生六斎念仏保存会の人たちによって演じられている。この壬生六斎念仏と綾傘鉦との関わりは長く、壬生村から7人の囃子方が参加したという宝暦7年(1757)の記録があるという。

綾傘鉦の歴史について簡単に眺めてみよう。明応9年(1500)以来、綾傘鉦は祇園祭に捧持型の傘鉦として参加していたが、天保5年(1834)に北観音山の部材を譲り受けて小型の鉦となった。4輪のついた曳山になったわけだが、他の鉦のように高い真木を立てるのではなく、唐破風の屋根上に傘鉦を立てて伝統を残したのである。しかし、30年後の元治元年(1864)、蛤御門の変による京都市内の大火によって、この小型の鉦は焼失してしまう。そして、明治12年(1879)に徒歩巡行で復活したが、長続きせず、明治17年(1884)を最後に休止状態となってしまった。昭和28年頃から元治元年の大火で焼け残った懸装品、房胴掛け、鶏、大傘、それに明治初期の復活時の棒振り衣裳、鉦、太鼓、楽譜などを町内で飾ようになった。そして、昭和48年(1973)、壬生六斎念仏講中が棒振り囃子を復活した。続いて昭和54年(1979)に綾傘鉦が復活して山鉦巡行に参加するようになった。復活当初から綾傘鉦では傘鉦を2基出していた。

#### 四条傘鉦

四条傘鉦の鉦町は下京区四条通西洞院西入る傘鉦町である。

現在の傘鉦は直径約2.4mの緋綾の蓋である。傘頂上部には金鍍金花瓶に若松を立て、花瓶の周囲に3本の赤御幣を斜めに立てている。染織家鈴鹿雄次郎氏による「麗光鳳舞之図」の傘垂がりを巡らせ、傘縁部からは5本の総角を垂らす。台車の胴掛けにはインド更紗を掛け、台車上部には鬼面隅飾りをつける。棒振り踊りの2組でそれぞれの構成員は8人で、赤熊を被った棒振り2人、それに花笠を被った鉦・太鼓・鼈が2人ずつである。四条傘鉦の復活にあたり、滋賀県甲賀市土山町前野の瀧樹神社のケンケト踊りを参考にして棒振り踊りを復元している。

四条傘鉦が昇山となったのは江戸期で、傘の下に台を設けて担ぎ棒一本を通して、昇山としたのは天保4年(1833)のことであるという。ここも元治元年の大火で焼失し、明治5年(1872)以降中断していた。昭和60年(1985)、傘鉦町は傘鉦本体を再興して居祭といって路上に飾ようになり、昭和63年(1988)に117年ぶりに山鉦巡行に復帰した。

京都祇園会は、その後の都市祭礼に大きな影響を与えた。室町中期から江戸初頭にかけて、京都祇園会の地方伝播と共に祭礼や芸能に随伴する傘鉦は全国各地に広がる。そして、城下町形成が進む中で各地に都市祭礼が成立し、京都祇園会の鉦は曳山として、山は昇山として、笠鉦は傘鉦として発展していくのである。

#### 【注記】

- (21) 『祇園社本縁録』は京都八坂神社の社伝をまとめたもの。
- (22) 『神宮御神宝図録』神宮徴古館・2008。
- (23) 石塚尊俊氏は『鷲舞』『西石見の民俗』の中で、『吾妻鏡』の寛喜2年(1130)6月の条に「七日丁卯。今夜被行鷲舞。晴賢奉仕之」という文があると記しているが、原文(国史大系本)にあたったところ、「七日丁卯。今夜被行鷲祭。晴賢奉仕之」であることを確認した。これは2日前の5日に幕府小御所(鎌倉将軍の後嗣の住居)の上に白鷲が集ったことから、陰陽師に占わせ、その結果7日夜に鷲祭を行ったという記事であり、鷲舞の記事ではない。同様に矢富巖夫氏も『鷲舞と津和野踊り』の中で石塚氏の説をそのまま引用している。
- (24) 矢富巖夫『鷲舞と津和野踊り』津和野ものがたり9・津和野町歴史シリーズ刊行会・1973。
- (25) 『諸国年中行事大成』は速水春暁齋が書いた祭礼行事の本で、文化3年(1806)に大坂で刊行。
- (26) 石塚尊俊『鷲舞』『西石見の民俗』和歌森太郎編・吉川弘文館・1962。

- (27) 桑原社家所蔵の弘化4年(1847)の「由緒調」と、坂田家所蔵の嘉永元年(1848)の「祇園社御祭礼之節 鷺舞覚書」である。
- (28) 『歳時広記』は宋代に陳元靚が書いた記録で、年中行事などの社会風俗を記している。
- (29) 矢野憲一『伊勢神宮の衣食住』角川ソフィア文庫・角川学術出版・2008。
- (30) 宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中公新書・中央公論社・1981。

#### 【参考文献】

- 松田元『祇園祭細見(山鉾篇)』京を語る会・1977。
- 春日和夫『豊国祭礼図屏風』週刊絵で知る日本史27・集英社・2011。
- 『春日若宮おん祭』第25集・春日若宮おん祭保存会・2009。